

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：31309

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380762

研究課題名(和文) 災害ソーシャルワーク理論の体系化に向けた「機能特性」に関する実証的研究

研究課題名(英文) An Empirical Study of Functional Uniqueness in Disaster Social Work Theory Systematization

研究代表者

白川 充 (SHIRAKAW, Mitsuru)

仙台白百合女子大学・人間学部・教授

研究者番号：00248692

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は「災害ソーシャルワーク理論」の体系化に向け、その機能特性を実証的に明らかにすることにある。研究方法は、ソーシャルワーカー8名に対してインタビュー調査を実施し、定性的(質的)コーディングを用いて分析した。研究成果としては192のセグメントより18のコアカテゴリーを生成しその内容を定義化した。

生成された18のコアカテゴリーより、災害ソーシャルワークの機能特性として3点が指摘できる。ソーシャルワークの本質的かつ社会や地域に開かれた機能に集約されたこと、当事者である本人のニーズを起点として実践が強調されたこと、その時点での対応のみならず先の展開を想定した働きが顕著なことである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to empirically determine its functional uniqueness towards systematizing "disaster social work theory." For the research method, an interview survey was conducted on 8 social workers and analyzed using qualitative (quantitative) coding. As research results, 18 core categories were generated from 192 segments and their contents were defined.

From the generated 18 core categories, three points can be identified as unique characteristics of disaster social work: (1) it was centralized into functions in societies and regions as an essential social work, (2) using actual needs of the affected as the focal point, action was emphasized, and (3) it not only focused on the response at the time but also had actions with future in mind.

研究分野：社会福祉学、ソーシャルワーク

キーワード：ソーシャルワーク機能 災害支援 東日本大震災

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の端緒は、日本ソーシャルワーク学会・研究推進第3委員会が2012年度より取り組んだ「災害対応プロジェクト」にある。このプロジェクトの目的は、東日本大震災後、宮城県仙台市を中心とする学会員によって研究チームが編成され、学会として「災害ソーシャルワーク研究」に取り組むというものであった。

(2) プロジェクトでは、震災対応を経験した3人のソーシャルワーカーに対するプレ・インタビューを行った。その結果、災害時のソーシャルワークには、従来のソーシャルワーク機能を「強化するもの」、新たに「追加するもの」、さらに「発展させるもの」があることが想定された。そこで「災害ソーシャルワーク理論」の体系化に向けて、この「機能特性」を実証的に明らかにすることが、次の課題となったのである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、「災害ソーシャルワーク理論」の体系化に向け、災害時におけるソーシャルワーカーの具体的機能及び機能特性を実証的に明らかにすることにある。

(2) 本研究は、単なる災害研究ではなく、東日本大震災におけるソーシャルワーク実践の分析によって、ソーシャルワークの特性のさらなる明確化と実践上の可能性を開拓することを目的としている。つまり災害時に限定したソーシャルワーク理論ではなく、災害にも強いソーシャルワーク理論の構築を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 調査対象者は社会福祉士資格取得後3年以上の実務経験があり、東日本大震災時からインタビュー時点まで、所属施設・機関に継続して所属しているソーシャルワーカー8名を、実践領域を勘案して選定した。

(2) インタビュー調査では、基本属性として「所属機関の形態と職種及び業務内容」を聴取したうえで、「災害発生時の状況と対応」を尋ね、初期対応後の主な業務内容(実践活動)について時間経過とともに確認した。

(3) 分析方法は、佐藤郁哉の定性的(質的)コーディングに基づいて行った。インタビュー調査によって得られたデータをすべて逐語録化し、ソーシャルワーカーが行った実践に該当する部分はセグメントを作成した。

192のセグメントに対して、ソーシャルワーカーの動きに着目しサブカテゴリーを生成した。継続的比較法によりサブカテゴリーから18のコアカテゴリーを生成した。最後にコアカテゴリーの表す内容を定義化した。

(4) 倫理的配慮として、研究の概要とプライバシー保護の遵守等について文書と口頭で説明し承諾を得た。また仙台白百合女子大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究成果

研究成果として、(1)18のコアカテゴリーを提示し、(2)研究成果の総括と、(3)今後の展望として残された課題について述べる。

(1) 18のコアカテゴリー

人命救助及び安全確保を優先して対応する。このカテゴリーは、人命救助及び安全確保を最優先し、避難誘導、避難路の確保、より安全な場所への誘導、食料の確保等によって、安全と安心を確保することである。

安否確認や被害状況に関する情報の収集・確認によって、課題やニーズを把握する。このカテゴリーは、安否情報や被害状況に関する情報を多様なルートを通じて収集したり、自ら行動することで確認し、現状での課題やニーズを正確に把握することである。

情報の集約と整理ができる仕組みをつくる。このカテゴリーは、被災状況等に関する情報の集約や整理を正確かつ効率的にすすめるために、共有シート等のツールを開発したり、共有のための仕組みをつくることである。

課題やニーズを予測して行動する。このカテゴリーは、これまでの取り組みや新たに収集された情報をもとに、起こりうる課題やニーズを事前に予測し、事態の展開を想定しながら行動することである。

把握できた課題に優先順位をつけながら対応する。このカテゴリーは、把握できた課題に優先順位をつけて、緊急性の高い人や生活上のニーズの高い人等に対して最も適切な方法で対応することである。

早急かつ的確に情報を発信する。このカテゴリーは、必要とされている情報と対象について判断したうえで、状況に最も適切な方法で早急かつ的確に発信することである。

先の展開を予測し、効率的かつ予防的に対応する。このカテゴリーは、この先の事態の展開を予測し、被災者へのニーズの充足を目指して効率的かつ予防的に対応することである。

組織としての力が最大限に発揮できるように調整する。このカテゴリーは、組織内における役割分担や機能の移行、組織間の情報交換や調整、福祉機関としての本来の専門性を発揮できるような取り組みへの回帰等に

よって、組織としての力が最大限に発揮できるように調整することである。

組織や機構を越えた連携と協働のための体制を整える。このカテゴリーは、既存の組織や機構、あるいは専門性を越えて、マニュアルの作成や協定を結ぶなど、連携と協働のための体制を整えることである。

専門職以外の新たな担い手の拡大に向けて取り組む。このカテゴリーは、専門職以外のボランティア等の多様な担い手を新規に開拓したり、組織化することによって先を見通した幅広い担い手の拡大に向けて取り組むことである。

被害者が主体的に関与できるように働きかける。このカテゴリーは、被災者が自分たちのルールづくりに取り組んだり、課題を共有することで、自分たちの課題として主体的に関与できるように働きかけることである。

特別な配慮を要する人に対して優先的かつ適切に対応する。このカテゴリーは、高齢者や社会的な支援を要する人等に対して、福祉避難所等の設定等を含め、優先的かつ適切に対応することである。

支援者自身や職員の身の安全を図る。このカテゴリーは、支援者自身や職員の安全を確保したり、職員の安否確認をするなど、支援する側の安全を確保することである。

被災者と向き合い、精神的なサポートと生きる意欲の醸成を図る。このカテゴリーは、精神的に落ち込んだり、生きる気力を失っている被災者と向き合い、精神的なサポートや生きる意欲の醸成に向けて働きかけることである。

被災によって生じた家族の課題と適切に対応する。このカテゴリーは、被災によって生じた家族の種々の課題や家族関係の変化に合わせて、適切に対応することである。

被災者の多様なニーズに応じ、具体的な資源を調整・提供する。このカテゴリーは、被災者の多様なニーズに応じて、適切な衣食住の提供、サービスの調整、ボランティアの手配等、具体的な資源を調整したり、提供することである。

ニーズに合わせた制度を柔軟に活用する。このカテゴリーは、被災の状況に合わせて、本人のニーズに制度を合わせる形で、柔軟に制度を運用することである。

地域における支援体制づくりに向けてネットワークを構築する。このカテゴリーは、単一の機関のみならず、地域全体での支援が

できる体制づくりに向け、ネットワークを構築し、今後のコミュニティづくりにつなげることである。

(2) 研究成果の総括

生成された 18 のコアカテゴリーを概観すると、災害ソーシャルワークの機能特性として指摘できることは、以下の 3 点である。

ソーシャルワークの本質的かつ社会や地域に開かれた機能に集約されたこと。

当事者である本人のニーズを起点として実践が強調されたこと。

その時点での対応のみならず、先の展開を想定した働きが顕著なこと。

(3) 今後の展望として残された課題

「災害ソーシャルワーク理論」の体系化に向けて顕在化した課題として 3 点挙げる。

第 1 の課題は、18 のコアカテゴリーとして生成された機能についての更なる検証である。これらの機能遂行に関して、「いつ(時期)」「どこで(場所・機関等)」発揮されるかについては、もっと精査する必要がある。それによって時系列でみる災害時のソーシャルワーカーの動きを方向付けることが可能となる。

第 2 の課題は、従来のソーシャルワーク機能とのすり合わせである。本研究のプレ・インタビューにおいて明らかになった「機能特性(強化・追加・発展)」の検証については、今回は十分な検証まで至らなかった。従来のソーシャルワーク機能と比較し、この機能特性の様相を明確にする作業は、「災害ソーシャルワーク理論」の体系化にはが不可避の工程である。

第 3 の課題は、「災害ソーシャルワーク」の汎化にむけた取り組みである。今回は東日本大震災における調査研究であったが、「自然災害」の範囲は広く、今回の結果と震災以外の場面でのソーシャルワーク機能との比較検討が必要である。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 3 件)

岩間 伸之 (2016)「災害ソーシャルワーク理論の体系化に向けた『機能特性』に関する実証的研究」、第 44 回日本医療社会福祉全国大会(第 35 回医療社会事業学会)、2016

米山 朱里・村山 くみ・藤井 美子・嘉村 藍・岩間 伸之・白川 充 (2015)「災害ソーシャルワーク理論の体系化に向けた『機能特性』に関する実証的研究(2)-災害時のソーシャルワーク機能の明確化とその特性-」、日本ソーシャルワーク学会第 32 回大会

村山 くみ・藤井 美子・佐々木 敦・米山 朱里・嘉村 藍・岩間 伸之・白川 充 (2013)「災害ソーシャルワーク理論の体系

化に向けた『機能特性』に関する実証的研究
(1)」、日本ソーシャルワーク学会第30回大会

〔図書〕(計 1 件)

白川 充・岩間 伸之・藤井 美子・佐々木 敦・村山 くみ・米山 朱里・嘉村 藍
(2017)『災害ソーシャルワーク理論の体系化にむけた「機能特性」に関する実証的研究(調査研究報告書)』、仙台白百合女子大学、1-154.

6. 研究組織

(1)研究代表者

白川 充 (SHIRAKAWA, Mitsuru)
仙台白百合女子大学・人間学部心理福祉
学科・教授
研究者番号：00248692

(2)研究分担者

岩間 伸之 (IWAMA, Nobuyuki)
大阪市立大学・大学院生活科学研究科・
教授
研究者番号：00285298

村山 くみ (MURAYAMA, Kumi)
東北福祉大学・社会福祉学部社会福祉
学科・講師
研究者番号：40382668

米山 朱里 (YONEYAMA, Juri)
東北福祉大学・社会福祉学部社会福祉
学科・講師
研究者番号：50553046

嘉村 藍 (KAMURA, Ai)
仙台白百合女子大学・人間学部心理福祉
学科・助教
研究者番号：60438570

(3)研究協力者

藤井 美子 (FUJII, Yosiko)

佐々木 敦 (SASAKI, Atsusi)